

アルツハイマー型認知症、前臨床期に腸内細菌叢の変化がみられる

近年、腸内細菌叢は心疾患やうつ病、アルツハイマー型認知症などさまざまな疾患と関連することが報告されている。アルツハイマー型認知症の患者の腸内細菌叢は、そうではない者の腸内細菌叢とは違った特徴があることがすでに示されているが、その違いが発症前の前臨床期から認められるのかは不明であった。

本研究では、正常な認知機能を有する 68-94 歳の高齢者 164 例を対象に、前臨床期アルツハイマー型認知症の人と健康な人とで腸内細菌叢の組成や機能に違いがあるのかについて断面研究により検討した。対象者のうち 49 例が、脳内にアミロイドβとタウタンパクの異常な蓄積がみられる前臨床期アルツハイマー型認知症であった。これらの者の腸内細菌叢と健康な人の腸内細菌叢を比較した結果、前臨床期の者では腸内細菌の種類や組成が健康な人とは異なることが示された。また、この違いはアミロイドβとタウタンパクの蓄積量と関連がみられたが、神経変性とは関連しなかった。アミロイドβとタウタンパクの蓄積量は認知症の症状が出る前に増加しており、腸内細菌叢の変化はアルツハイマー型認知症のかなり早い段階から認められた。

したがって、認知症の症状がない前臨床期アルツハイマー型認知症の人では、そうではない人と比べて腸内細菌叢に違いがあることが示された。この結果はアルツハイマー型認知症の病因の解明や腸由来のリスクマーカーの同定につながる可能性がある。

出典：Science Translational Medicine. 2023; 15(700): eabo2984.